

ヤマト王権の推移・その2

イリ系大王からワケ系大王へ

～仁徳大王らによる河内王権の成立～

飯田眞理

【はじめに】 前回では、欠史八代大王は存在せず、ヤマト王権は4世紀半ばに神武＝崇神から始まったことを論証した。今回はその後の王権の推移について筆者の説を述べる。記紀には、崇神・垂仁大王の後、景行・ヤマトタケル・成務・仲哀への大王系譜が記されていて、その後、神功王后が幼いホムタワケ（後の応神大王）を連れ、武内宿禰を従えて東遷して畿内の籠坂王、忍熊王を打ち滅ぼして摂政となり応神、仁徳大王と続くことになっている。

筆者は、景行から神功王后までは、非存在で、神功王后の子とする応神大王も創作で、応神大王（ホムタワケ）とは垂仁の王子＝ホムツワケであったと考える。垂仁大王時代、韓半島では北部九州と韓半島の倭人が新羅に攻勢を何度もかけていたが、高句麗の広開土王のために惨敗する。その結果、北部九州と韓半島の倭人は、東遷して騎馬文化をもたらしたと推測する。これが仁徳大王らによる河内王権の成立である。以上のことを、詳しく論証する。

1. 垂仁大王から仁徳大王へ

(1) イリ系王権の弱体化

★崇神大王の倭名は「ミマキイリヒコ」で、次の垂仁大王の倭名は「イクメイリヒコイサチ」、「ミ」や「ミ」は敬称の接頭語で「マキ」は纏向のこと、「クメ」は橿原の久米の地のことと推察する。「イリ」は祭祀に関係ある語と考えられる。日本書紀には垂仁大王が「クメ」の橿原久米の地で祀り事をしたと記していて「イクメイリヒコイサチ」の名と合致する。邪馬台国大和説の方々が過大評価する纏向の建物跡も崇神大王が祀り事をした地であると考えられる。崇神、垂仁やその他の王子・王女に「イリ」という称号がつくことから、崇神王朝は「イリ王朝」として、応神大王からの「ワケ王朝」に交替したという説がある。水野裕氏をはじめ、井上光貞、直木孝次郎、岡田精司、上田正昭などの多くの文献史学者が（神功王后は創作で）応神または仁徳大王による王朝交替説（河内王朝説）を提唱している。筆者も王朝という語は使いたくないが、神武＝崇神系と応神＝仁徳系では大王の系譜が異なるということには同意する。崇神や応神という天皇名は奈良時代の淡海三船がつけた漢風諡号であるが、どちらも「神」という始祖王を意味する語が付けられている。このことも大王の系譜が交替したとする説を補強

する。しかし、記紀の神功紀～仁徳紀の記述には矛盾が多く、史実性が極めて弱いことが感じられる。筆者は記紀の内容を詳しく検討した結果、ようやく矛盾を解消し、合理的に王統の交替を説明できるようになった。

(2) 垂仁大王時代の事績

★まず崇神の次の垂仁紀から説明する必要がある。下に日本書紀に記される垂仁大王時代の主な事績を記す。

- (ア) 五大夫（阿部氏、和爾氏、中臣氏、物部氏、大伴氏）を定めた。
- (イ) 倭姫が天照大神を鎮座させる地を転々として最終的に伊勢神宮を建てられた。
- (ウ) 出雲の振根から神宝を奪った。
- (エ) 大加羅の王子・都怒我阿羅斯等（ツヌガアリシト）が越の気比の浦についた。
- (オ) 新羅の王子・天日槍がやってきた。（古事記では応神記に記される。）
- (カ) 相撲の元祖の記載
- (キ) 出雲の野見宿禰（土師氏の祖）による埴輪の起源。
- (ク) 天日槍の後裔である田道真守を常世国に遣わして「非時の果実（橘）」を求めようとした。

★以上のように多彩なことが記されている。これら全てが真実であったこととは思われないが、垂仁大王が実在したことは確かと考える。そしてこの垂仁大王のとき大きな反乱事件が記されている。「狭穂彦・狭穂姫の乱」である。以下に要約する。

狭穂姫は垂仁の王后であったが、兄の狭穂彦の指示により垂仁を殺そうとするが、情のため殺すことが出来ず、狭穂彦と共に殺される。そのとき燃える稲城から「誉津別（ホムツワケ）」という王子が助け出される。その王子は大きくなっても、言葉を言えなかったが、鳥取部が捕まえた鶴により言葉が言えるようになった。一方、垂仁大王は新しい王后として丹波から日葉酢媛を迎えて五十瓊敷入彦（イニシキイリヒコ）や大足彦（オオタラシヒコ）、倭姫などが生まれる。兄の五十瓊敷入彦は、なぜか茅渟（和泉の地）で剣を千口造り石上神宮に納めて、石上神宮の神宝を掌る役におさまってしまう。垂仁のあとを継いだのは弟の大足彦つまり景行大王であった。

★「狭穂彦・狭穂姫の乱」は潤色されていて全てが真実ではない。しかし叛乱は実際に起きた事件で「誉津別（ホムツワケ）」も実在したと考えられる。ただし垂仁の後の大足彦（景行大王）は実在しなかった。さらに景行の後の成務、仲哀神功皇后もヤマトタケルを含めて、垂仁と応神＝仁徳を繋ぐために創作された大王である。これらについて詳しく解説していく。

(2) 垂仁の王子誉津別(ホムツワケ)について

★それでは、垂仁大王の後のヤマトの王権は実際にはどのようなようになったのか、筆者が推測していることを述べる。「狭穂彦・狭穂姫」の乱の後遺症は大きかったと考えられる。皇祖神の天照大神は倭姫とともにヤマトから離れることになった。さらに垂仁の後継者と推察できるイニシキイリヒコは大王として認められず、石上神宮の掌官にされてしまっている。つまり、ヤマトの地では

崇神系の王権は弱体化したのである。神武（崇神）東征以前の和爾氏などの在地氏族などの力が強まったと推察できる。ついでに述べると、このときヤマトを追い出された天照大神を祀る斎宮の倭姫が辿り着いて建てられたのが伊勢神宮とされているが、それは現在の三重県の伊勢でなく、丹波の伊勢神宮（京都府の大江町にある元伊勢神宮のこと）と筆者は考えている。丹波の日葉酢媛を妃としたことと整合性があり、丹波勢力も倭国連合に関与を強めたのであろう。



京都府福知山市丹後の大江町（現福知山市）の 元伊勢・皇大神社（内宮）

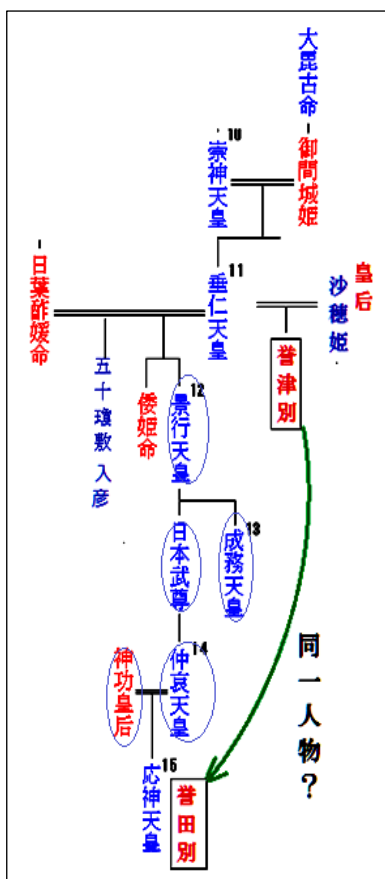
- ★一方、「ものが言えなかった」垂仁の最初の王子の「誉津別」はどのようになったのであろうか。日本書紀ではヤマトに居たことになっているが、古事記ではヤマトを追い出され、鵲を追って、諸国を放浪したことが記されている。木の国から播磨・因幡・丹波、但馬・近江・美濃・尾張・信濃など諸国を放浪して最終的に越に到ったことになっている。王子といえども母が謀反人である以上、ヤマトには居ることは許されなかったのであろう。「垂仁＝イリ大王」の子であるにもかかわらず、「ワケ」という地方の首長に与えられる称号が付くことも、地方に追放されたことを示している。
- ★筆者は12代の景行から14代の仲哀・神功は非実在であると考え。そうすると、誉津別と応神天皇（誉田別）は同じ世代になる。越のクニに居ることになった誉津別（ホムツワケ）こそが、後の応神大王（誉田別）であり、との説が浮上する。
- ★新日本紀に引用されている「上宮記一云」では、応神天皇のことを凡牟都和希（ホムツワケ）王と記している。つまり、応神大王とされる（誉津別＝誉田別）の五世孫が継体大王であることになる。
- ★この「誉津別＝誉田別」説は決して奇抜なものではなく、吉井巖氏も述べているのである。吉井氏の説については、最後に詳しく述べる。

筆者にとっても、この説は、河内王権成立と深く関係するものである。景行、ヤマトタケル、成務、仲哀・神功の非存在と仁徳大王による河内王権の成立について述べていくことにする。

(3) 偽りの大王の系譜

① 景行が非実在である根拠

- (ア) 景行の兄のイニシキイリヒコは「イリ」という称号がつくことから垂仁の王子にふさわしい名であるが、弟の景行大王はオオタラシヒコオシロワケという名である。推古朝時代の「タラシヒコ」と応神・仁徳朝の「ワケ」という後世風の二人分の称号が合体されたような名である。
- (イ) 兄弟のうちオオタラシヒコが大王になった理由が極めて不自然で創作と考えられる。父王である垂仁大王が兄弟にほしいものを尋ねたところ、兄のイニシキイリヒコは「弓矢がほしい」、弟のオオタラシヒコは「天皇の位がほしい」といったことでオオタラシヒコが大王になったとされる。二人の王子が大王の位を譲り合ったり争ったりすることはあり得るが、要望で大王が決まってしまうことはあり得ない。
- (ウ) 景行紀の内容が熊襲征伐やヤマトタケルの事跡などほとんどが創作的物語からなっていて、ヤマトの大王としての存在感がほとんどない。筆者は景行やヤマトタケルのクマソ征伐は、中国の魏志倭人伝に記す「倭国の大乱」に合わすように創作されたものと推測している。
- (エ) 古事記ではヤマトタケルの孫のカグロ姫が、父親である景行の妃になっているなど、世代が全く混乱している。（さらにカグロ姫は後の応神大王の妃としても記されている。）このことから推測できることは、ヤマトタケル物語が先に成立していて、その後の推古朝での天皇記・国記（帝紀・旧辞）の成立のときに景行大王が創作されたと推測できる。



活目入彦五十狭茅尊（垂仁）の子
 (母：沙穗姫) 菅津別
 (母：日葉酢姫) 五十瓊敷入彦
 大足彦忍代別尊（景行）
 大中姫、倭姫

②ヤマトタケル、成務、仲哀も創作されたもの

- (ア) ヤマトタケルは景行の子で、景行大王の命令で熊襲、出雲、東国など諸国を平定した英雄としての物語である。このような諸国征服がたった一人の力で短期間でできたはずはなく、ヤマト政権が版図を広げていったことを一人の英雄物語として創作されたと考えて間違いない。
- (イ) 景行の後は成務で和名はワカタラシヒコでやはり後世名の「タラシ」が付く。宮はなぜかヤマトでなく近江の高穴穂の宮になっていて。事績としては飛鳥時代に成立した国造の制度のことや架空の人物武内宿禰を大臣としたことなどが記されている。実在しない景行の子であることも含めて考えると成務も当然非実在となる。
- (ウ) 次の仲哀（タラシナカツヒコ）はヤマトタケルの子というだけでも実在しなかったことになる。また仲哀の宮は山口県穴門の豊浦宮、筑紫の檀日の宮、敦賀の気比の宮などの神功王後の行先ばかりである。またこの大王には主体性がなく神功王後に付き従っているだけの引き立て役のように記されている。そして最後は九州で神の啓示に逆らったため死んでしまうような非現実的な話になっている。仲哀が創作であることはだれもが認めることである。

2. 神功王后記事の考察

(1) 神功王后（息長タラシ姫）は非存在



男装された神功皇后と、皇子を抱く武内宿禰（佐々木尚文）

①神功王后非存在である根拠

- (ア) 妊娠中であるので、腹に石を当てさらしを巻いて出産を遅らせて、海を渡って大將軍となって新羅を征服したことになっている。これは到底真実とは思われない。

(イ) 古事記では、神功王后と仲哀大王との間にホムヤワケとオオトモワケ(後の応神大王ホムタワケ)の二人の王子が生まれたとされている。ホムタワケは筑紫の蚊田(宇美)で生まれた最初の王子になっていて、兄が存在することとは矛盾する。

(古事記成立の前に、息長氏において、神功王后に関係しない息長タラシ姫の説話が存在していた可能性がある。)

(ウ) 王后が仲哀と共に九州クマソ征伐に同行することも史実ではあり得ず、また「息長」という名から推測できるように近江の豪族が後ろ楯となっているはずであり、その王后の帰還を畿内の勢力が妨げて大王位争奪戦になることも不可解である。

②神功王后の年代

★神功紀には魏志倭人伝が何度も引用されていて、神功王后を卑弥呼に擬している。一方百済王の即位年も記されていて、百済本記の年代と一致している。下に記す。

*神功 55 年 (神功没年 69 年・己丑=389 年から逆算すると **375 年**にあたる。)

肖古王が薨じた。王子貴須が王となった。(百済本紀での近肖古王没年 **375 年**に合致)

*神功 64 年 (**384 年**)、百済の貴須王が薨じた。枕流王が王となった。

(百済本紀での没年 **384 年**に合致)

*神功 65 年 (**385 年**) 枕流王が薨じた。阿花王は年若く叔父辰斯が王となった。

(百済本紀での没年 **385 年**に合致)

一方で、魏志倭人伝(4回)が引用されていて、三世紀ともされている。

*神功 39 年 (**359 年**) この年己未—魏志に云わく、明帝の景初三年 (**239 年**) 六月、倭女王・・朝貢す。

*神功 40 年 (**360 年**) —魏志に云わく、正始元年 (**240 年**)、建忠校尉等を遣わして、詔書や印綬を持たせ倭国へ行かせた。

*神功 43 年 (**363 年**) —魏志にいう、正始四年 (**243 年**)、

倭王はまた使者の大夫伊声者掖耶ら八人を遣わした。

*神功 66 年 (**386 年**) 晋の武帝泰始二年 (**266 年**) 晋の国の居注に、

倭の女王が何度も通訳を重ねて貢献したとある。

※神功紀=百済記の年代と、引用している魏志倭人伝の年代とは、

全て干支2巡分**120年**の差があることがわかる。

★つまり、神功紀は、一つは「熊襲征伐」も含めて、中国の史書(魏志倭人伝)との整合性を示すために創作されたものである。他方で、倭国が百済と同盟して、新羅に侵攻していた時代であることも示している。四世紀後半における倭の新羅侵攻の事実を神功王后の物語として創作したものである。これについて、次に詳しく解説する。

(2)神功紀は百済三書や新羅本紀を参考にして創作されたもの

★古代史ネット第8号で述べたことであるが、改めて述べる。

《三国史記・新羅本記と日本書紀・仲哀・神功紀の記述を比較から》

(a) 《日本書紀・仲哀9年冬十月》(神功皇后は)鰐浦から出発された。新羅王は戦

慄してなすすべを知らなかった。縄を解いて馬飼いとされた。・・・皇后がもっておられて矛を新羅王の門にたて後世への印とした。その矛は今も新羅王の門にたっている。新羅王の波沙寝錦は微叱己知波珍干岐（みしこみはとりかんき）を人質として、金銀・彩色、綾、羅（うすはた） 縑絹（かとりきぬ）を沢山の舟に乗せて軍船に従わせた。

★上に記される波沙寝錦とは新羅の5代王「婆娑尼師今」のことで、
微叱己知波珍干岐とは、第18代實聖王時代の「末斯欣」のことである。
これだけでも日本書紀が、新羅本紀を参考にしたことがわかる。

(b) <<日本書紀・仲哀9年>>—ある説によると・・・仲哀天皇は急病で亡くなられた。・・・皇后は男装して新羅を討たれた。神はこれを導かれた。船に乗せた波は遠く新羅国の中まで押し寄せた。新羅王宇留助富利智干は、お出迎えして頭を地につけて「手前は今後、日本国においでになる神の御子に内官家として絶え間なく朝貢いたします」と申し上げた。また、一説によると新羅王を虜にして海部に行き、膝の骨を抜いて石の上に腹ばわせた。その後斬って砂の中に埋めた。新羅における日本の使者として一人の男を残して、帰還された。その後、新羅王の妻が、夫の屍を埋めた地を知らないので、男を誘惑するつもりで言った。「お前が王の屍を埋めたところを知らせてくれたら、厚く報いてやろう。また自分はお前の妻となろう。」と。男は嘘を信用して屍を埋めたところをお告げた。王の妻と国人とは謀って男を殺した。さらに王の屍を取り出してよその地に葬った。そのとき男の屍をとって、王の墓の土の底に埋め、王の棺の下にして、「尊いものと卑しいものとの順番はこのようなものだ。」といった。天皇（なぜか皇后でない？）はこれを聞いてまた怒られ、大兵を送って新羅を滅ぼされようとした。軍船は海に満ちて新羅に至った。このとき新羅の国人は大いに怖れ、皆で謀って王の妻を殺して罪を謝った、

★宇留助富利智干は新羅本紀に記す「伊瀆の干老」のことである。次の新羅本紀の記事と比較してほしい。

(c) 【新羅本紀・新羅本紀11代・助賁尼師今および12代・沾解尼師今の記事】
倭国の使臣、葛那古が来朝して客館に滞在していた。干老はその接待の役に任ぜられた。彼は倭の使臣に戯れて「近いうちに汝の王を塩作りの奴隷にし、王妃を炊事婦にする」といった。倭王はこれを聞いて怒り、將軍、于道朱君を派遣して、わが国に攻めて来たので、大王はこれを防ごうと柚村に出て居た。干老は大王の所に行って「今度のこの患は、私が言葉を慎まなかったのが原因でありますので、私がお前の責に当ります。」と行って、ついに倭軍の所に行って「前日の言は、ただ冗談に言っただけである。どうしてそのような言を信じて、軍を起こしてこのように攻めてくるのか。」といった。倭人はこれには答えなくて、彼を捕まえて、積み柴の上において焼き殺してから去って行った。この時、干老の子は・・・後に訖解尼師今（16代王）になった。末鄒王（13代王）の代に倭国の大臣が来た時、干老の妻は国王に乞うて、家

に倭国の使臣を招待して酒宴を設け、彼らが酒に酔うや、力の強いものに彼らを庭に引きおろし焼殺して、夫を焼殺された恨みをはらした。これに倭人は怒り、金城に攻めて来たが、勝てずして引き返した。

★日本書紀のほうは日本に都合よいように改変されているが、**宇留助富利智干**（于老）が倭人に殺され、于老の妻が倭の使いを殺して復讐したことは共通している。神功王后が「**男装した**」や「**天皇**」と記されていることから、日本書紀が新羅本紀を参考にして創作したことは間違いない。最後に「**微叱已知波珍干岐**」（未斯欣）の記事を比較する。

(d) 《日本書紀・神功摂政5年春三月》

新羅王が汗礼斯伐・毛麻利叱智（モマリシチ）・富羅母智らを遣わして朝貢した。そして王は先の人質、微叱許智伐早を取り返そうという気があった。それで許智伐早に嘘をいわせるようにした。「使者の汗礼斯伐・毛麻利叱智が私に告げて『わが王は私が長らく帰らないので、妻子を没収して官奴としてしまった。』といいます。どうか本国に帰って嘘かまことか調べさせてほしいと思います。」といわせた。皇太后はお許しになった。葛城襲津彦をつき合わせてお遣わしになった。対馬について鰐浦に泊まった。そのとき新羅の使・毛麻利叱智らは、ひそかに舟の水手を手配して、微叱許智伐早を乗せて新羅へ逃れさせた。草で人形をつくり、微叱許智伐早の床に置き、いかにも病気になったように偽り、襲津彦に告げて「微叱許智は病気になり死にかかっています。」といった。襲津彦は人を遣わして病者を見させた。そこで騙されたことがわかり、新羅の使い三人を捕えて、檻の中に入れて焼き殺した。襲津彦は新羅に行き、多大浦に陣して、草羅城を攻め落として還った。このときの捕虜たちは、今の桑原、佐糜、高宮、忍海などの4つの村の漢人の先祖である。

(e) 【新羅本紀】19代・訥祇麻立干2年(418年) **堤上(モマル)**が高句麗から人質であった王弟のト好を連れて還った。大王は喜び、**堤上**をいたわって言った。自分の二人の弟のことを左右のひじのように思っている。**堤上**は・・・言った。「臣は取るに足りない人間ですが、既に一身は国に捧げてありますので、最後までいのちは恥ずかしめないつもりです。しかし高句麗は大国で王もまた賢君です。それゆえ臣は一言でもってこれを悟らすことが」できました。ですが、もし倭人は口と舌とだけで持って論ずことができなかつたとしたら、臣は謀りごとでもって王子を帰らせてごらんにいれましょう。臣はかの国に背いたために追出されたのだということにして、かの地のものたちにはそう信じさせましょう。」

堤上は死をもって自ら誓い、妻子とも会わずに栗浦に至ると、舟を浮かべて倭に向かった。・・・**堤上**は振り返ってこう言った。「自分は一命を賭けて敵国に入るのだ。お前はもう二度と会うことは期待するな。」

こうして**堤上**は**ただちに倭に入った**。ところが**倭王**は（前に来た百濟人の言葉が

真実で、新羅においた見張りの兵を高句麗に殺されていたので、百濟人の言葉を信じて新羅人は疑っていたから) たとえ新羅から国に叛いた者があっても、其の内心は疑っていた。

そこで提上が「新羅の王は未斯欣と提上の家族を捕えています。」という、**倭王**はようやく提上がほんとうに叛いてきた者だと信じるようになって、兵を出して新羅を襲うことにした。一行が出発して海中の山島(対馬?)まで来ると、倭の將軍たちは新羅を滅ぼしたのは、未斯欣と提上の妻子を捕まえて連れて帰ろうと密議した。提上はこれを知ると、未斯欣と一緒に船で遊んだ。

自分たちが魚や鴨を捕えていれば倭人たちはそれを見て何も知らずに喜んでいると思うだろう、というわけである。

さて提上はその舟の上で未斯欣に、こっそりと本国にお帰りになったらいかがです、と勧めた。すると未斯欣は「自分はあなたを父のようにうやまっている。どうしてひとりで帰ることができようか」と答えた。

提上は言った。「もし、ふたりしていっしょに帰れば、きった謀りごとはうまくいかないでしょう」未斯欣は提上の首を抱いて泣き、別れを告げて、新羅に帰っていった。」

提上は部屋の中でひとりで寝て、朝おそく起き、そうすることで未斯欣を遠くまで逃げさせようとした。そして人々が、「將軍はなぜ早く起きられないのですか」とういと「きのう舟遊びをしたので疲れています。それで早く起きられないのです。」と答えた。それから提上が部屋を出てくると、倭人はようやく未斯欣が逃げたことを知った。・・・そのため倭人は提上を倭王のところに戻して、それから木島に流した。そして、そのあとまだどれほどもたたないうちに使いの者が来て、薪の火でもって提上の肢体を焼けたただらさせたのち、これを斬った。

*これも、日本書紀と新羅本紀ではほぼ同じ内容である。日本書紀では、神功王後の他に、葛城襲津彦が登場し、草羅城を攻め落とした記事が追加されている。新羅本紀の文面からは、倭王が存在した地や提上が滞在した地は畿内ではあり得ず、山島に近いところ、すなわち北部九州の沿岸地域であることがわかる。提上が新羅の船で出て「ただちに倭に入った」ことや、襲津彦が(伽耶の)多大浦に陣したことから、また朝鮮半島にも倭の領域だったことがわかる。次章ではこれらについて検証する。

3. 広開土王碑、新羅本紀、百濟本紀に記す倭は北部九州

(1) 高句麗広開土王(好太王) 碑に記す倭について

*好太王碑文は好太王の業績を称えるために息子の長寿王が414年に建てたものであり、建てられた時期が好太王の死の直後であることから信憑性の高い一級資料である。

《碑文の通説訳》

*六年(396年)、王は水軍を率いて百済国を討った。その理由は、百済と新羅はもともと高句麗に隷属し朝貢していたが、倭国が辛卯の年(391年)に海を渡り、百済などを打ち破って新羅を臣下としたためである。王は百済の多くの城を占領したにも係わらず、なお抵抗したので、漢江を渡り、王城を攻めた。躬ら水軍を率いて残国を討科し・・・

*九年己亥(399年)、百残、誓いに違ひ、倭と和通す。王平穰巡下す。而るに新羅、使いを遣はして、王に日ひて云、『倭人、其の国境に満ち、城池を潰破し、奴客を以て民と為せり。王に帰して命を請はん』と…十年庚子(400年)、歩騎五万を遣はして、往きて新羅を救わしむ。男居城従り新羅城に至る。倭、其の中に満てり。官兵方に至り、倭賊退く。倭軍の背後を急追し、任那加羅の従拔城へ至り城は帰服したが、安羅戎兵が新羅城を抜いた、倭寇が城内を潰した。倭と安羅人戎兵は新羅城・・・

* …十四年甲辰(404年)、倭不軌にして帯方界に侵入す。…倭寇潰敗し、斬殺無数なり」

★4世紀後半から5世紀初頭にかけて倭が韓半島で軍事的攻勢に出ていることがわかる。

三国史記・新羅本紀には、倭人の侵攻の記事が極めて多く記されていて、公開土王碑文と同じ内容と思われる記事(新392年:新羅は高句麗に人質を出してことなど)もある。これについては、古代史ネット8号で述べたので省略する。



公開土王と戦った倭の領域



★碑文や新羅本紀に記すような、迅速かつ頻繁に韓半島で軍事行動を主導した「倭王」はヤマトの大王ではあり得ず、北部九州の首長であると考えられる。のちの時代でも、ヤマト王権が中心になって朝鮮半島に多くの軍兵を送ったのは白村江の戦いのときだけである。神功から允恭・安康時代までヤマトが高句麗と戦った記載が日本書紀には一切ないことから、碑文に記す倭はヤマトではなく北部九州であったことは間違いないであろう。

★日本書紀の雄略時代には、紀小弓宿禰、紀生磐宿禰、大磐宿禰親子、韓子宿禰、小鹿火宿禰、などが任那を拠点として複雑な軍事行動をしていることが記されている。彼らはいずれもヤマトの天皇の命を無視している。つまりこの時代でもヤマト王権の韓半島への直接

的な支配は及ばなかったのである。ましてや 4 世紀にヤマト王権の支配が加羅に及ぶはずがない。当時ヤマト王権は成立していたが、倭国は各地域王国の連合体でありヤマトの大
王は、あくまでも倭の代表にすぎなかったのである。

(2) 新羅本紀に記す 4 世紀～5 世紀初頭の倭について

～日本書紀・神功紀との比較からの考察～

① 于老の殺害事件<前章に示した新羅本紀記事(c) (e)>

★新羅本紀に記す于老の殺害事件の全ては真実ではないが、実際にあった事件と考えられる。倭
国の使臣や倭王が記されていて、新羅との交渉があったことが記されている。新羅と倭国とが
使者を派遣し合ったとの記事もある。4 世紀代に、このような新羅と交渉した倭王はヤマトの
王とは考えられない。于老を殺害した倭の将軍も「于道朱君」と記されていて、**熊本県宇土半
島の人物**の可能性が高い。

(日本書紀では、倭王を神功王后として、ほぼ同じ内容で、最後には倭国が勝利したように記載
されている。)

② 倭国王の求婚事件

(f) 16 代・訖解尼師今三年 312 年春三月 倭国の国王が使臣をつかわして、息子のために求 婚
したので、王は 15 代・基臨尼師今三年 **阿飡の急利の娘** を倭国に送った。

三十五年 344 年 春二月 倭国が使者をつかわして、婚姻を請うたが、すでに以前に女子を
嫁がせたことがあるので断った。

三十六年 345 年 二月 倭王が、**書を送って** 国交を断ってきた。

三十七年 346 年 倭兵が風島に来て、進んで金城を包囲して攻めて来た。

17 代・奈勿尼師今

九年 364 年 倭人は多数をたのんで、そのまま直進して来る所を伏兵が起ってその不意を討つ
と、倭人は大いに敗れて逃走した。

三十七年 392 年 春正月 高句麗に使いを出して伊飡の子の實聖を人質として送った。

三十八年 倭人が来て金城を包囲し、5 日も解かなかった。

★新羅と倭の外交に「文書」や使臣を通じてなされたことが記されている。「文書」は真実か
どうかはわからないが、交流があったことや阿飡の急利の娘が倭国王の妃になったことは事
実であろう。4 世紀後半に遠く離れたヤマトの王では、このような新羅との外交はできないと
考えられる。日本書紀には、新羅王族の女が大王の妃になったことは記されていないことか
ら、この婚姻はヤマトには伝わっていなかったと考えられる。一方、「筑前の国風土記逸
文」においては、「五十迹（伊都国の王）は高麗の国の意呂山に天から下った天の日矛（新
羅の王子）の末裔である。」と記されている。阿飡の急利の娘と天の日矛（新羅の王子）と
の関係はわからないが、新羅王族の女を妃にした倭王とは伊都国の首長だったと推察できる。

③ 末斯欣の人質事件<前章の記事(e)>

★新羅本紀の列伝では末斯欣の帰還のため倭に向かった**提上**（モマル）は新羅の栗浦を出発して
「ただちに」倭国に着いたと記す。そして「その地で倭王と 言葉を交わした交渉」をして、帰還

の際も、倭国から舟で対馬と思われる島に着いたことになっている。よって**末斯欣**が人質とされた地と**倭王**の宮は玄界灘沿岸に間違いになる。

(3) 百済との交流の始まり(日本書紀と百済本紀の比較より)

① 斯麻宿禰と千熊長彦

《日本書紀・神功紀》

《神功 46 年》 **斯麻宿禰**を卓淳国に遣わした。卓淳の王、未錦早岐が斯麻宿禰にいうには「甲子 364 年の年百済人、久氏ら三人が来て「百済王は東の方に、日本という貴い国があることを聞いて、我らを遣わした。・ ・もしその国の使いがあれば知らせてほしい」と。そこで斯麻宿禰は、従者の爾波移と卓淳の過古を百済の国に遣わした。百済王は喜んで、五色の絹一匹ずつ、角弓箭、鉄鋌四十枚を爾波移に与えた。斯麻宿禰は卓淳国から還った。皇后は「武内宿禰に譲して行わしめよ。千熊長彦を使いとせば、所願のごとくならむ」とのたまう。四十七年、百済王、久氏、弥州流、莫古らを遣わして朝貢した。新羅の使いが久氏と共に詣でた。新羅人は、久氏らが道に迷っているとき捕まえて貢物を奪ったとのこと。皇后は「武内宿禰に譲して行わしめよ。千熊長彦を使いとせば所願のごとくならむ」とのたまう。

(別注：千熊長彦は、分明しくその姓を知らざる人なり。一に云わく、武蔵国の人。今は額田部槻本首等が始祖なりという。百済記に職麻那那加比跨と云えるは、蓋し是か。) 千熊長彦を新羅に派遣して責めた。

★神功紀において、朝鮮半島関係記事で武内宿禰以外の倭人が登場するのは、神功 46 年 (366 年)、「**斯麻宿禰**を卓淳国に遣わした」と記すのが初出である。続いて、百済・新羅の朝貢にからんで、**千熊長彦**が登場する。そしてその注には「**千熊長彦は、分明しくその姓を知らざる人なり。一に云わく、武蔵国の人。今は是額田部槻本首等が始祖なりという。百済記に職麻那那加比跨と云えるは、蓋し是か。**」と記されている。つまり、**千熊長彦**という人物は、倭では伝承されておらず、百済記の「職麻那那加比跨 (シマナナカヒコ)」が記載の元と考えられる。もしこの百済との交流の始まりのときの倭王がヤマトの王なら、ヤマトの氏族である物部氏、大伴氏、和爾氏、阿部氏、などを派遣したであろう。斯麻宿禰 (職麻那那加比跨も) は、ヤマトの人物ではなく、伊都国の北 (シマ半島) に存在した斯馬国の人物と考えられる。

② 七枝刀を贈られた倭王

*《神功 49 年 (369 年)》 荒田別・鹿我別を以って將軍とする。則ち沙白・蓋蘆を送って増兵を請うた。木羅斤資・沙沙奴跨に命じて精兵を率いて沙白・蓋蘆と一緒に遣わされた。ともに卓淳にあつまり新羅を討ち破った。比自本、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅の七か国を平定した。兵を西に移して古奚津に至りトムタレ (耽羅国?) を滅ぼし百済に与え

た。百済王の肖古と貴須はまた兵を率いてやってきて、比利・辟中、布弥支、半古の4つの邑が自然に降伏した。百済王と荒田別・鹿我別、木羅斤資らはともに、意流村で一緒になり、相見えて喜んだ。千熊長彦と百済王とは百済国へ行き、百済王は朝貢を誓った。千熊長彦を連れて都に至り、久氏らをつき添わせて（倭国へ）送った。

*《神功 52 年（372 年）》久氏らは千熊長彦に従ってやってきた。そして**七枝刀一口**、七子鏡一面、および種々の重宝を奉った。そして「我が国の西に河があり、水源は谷耶の鉄山から出ています。この河の水を飲み、この山の鉄を採り、ひたすら聖朝に奉ります。・五十五年、肖古王が薨じた。王子貴須が王となった。（百済本紀では375年）

★軍人の荒田別・鹿我別は上毛野氏の祖とされる人物で、通説では渡来人になっている。朝鮮半島の倭人と考えられる。百済と倭が共同で新羅を討ったことになっている。（ただ、この時代には百済と新羅は友好関係にあったので、新羅を討ったことは日本書紀の創作である。）近肖古王の時代（346～375）に百済は高句麗との戦いに勝利している。倭が援軍を送っていたのであろう。七枝刀はその友好の記念として贈られたのである。この時代に百済を軍事的に援助した倭はヤマトではあり得ず、北部九州勢力であったのは間違いないことである。七枝刀は九州倭王（伊都国の王）に贈られたもので、その後の九州倭王の東遷のときにヤマトに持ち込まれて石上神宮に納まったと筆者は推測する。（ただ、百済本紀には倭との交流や七枝刀のことが記されていないことは不可解である。）

③葛城襲津彦について

《神功 62 年》新羅が朝貢しなかった。その年襲津彦を遣わして新羅を討たせた。

—**百済記**に述べている。壬午の年 375 年新羅が日本に朝貢しなかった。日本は沙至比跨を遣わして撃たせた。新羅人は美女二人を飾って港に迎えて欺いた。沙至比跨はその美女を受け入れ、反対に加羅の国を討った。加羅の国王・己本早岐らは、その人民を連れて百済に逃げた。百済はそれを厚遇した。加羅王の妹・既殿至が大和の国にやってきて申し上げるのに「天皇は**沙至比跨**を遣わして新羅を討たされたが、新羅の美女を納れて討つことをせず、反対に加羅国を滅ぼしました。兄弟・人民は皆流浪しました。天皇（女王でない？）は大いに怒られ、木羅斤資を遣わして、兵を率いて加羅に來り、その国を回復されたという。ある説によると、沙至比跨は天皇の怒りを知って、公には帰らず自ら身を隠した。その妹が帝に仕えることがあり、沙至比跨はこっそり使いを出し、天皇の怒りが解けたかどうか探らせた。妹は夢に託し「今日の夢に沙至比跨を見ました」と申し上げた。天皇は大いに怒られ「沙至比跨はどうしてやってきたのだ」といわれた。妹は天皇の言葉を沙至比跨に報告した。沙至比跨は許されないことを知って、岩穴に入って死んだという。—

★この記事以降も、襲津彦は応神紀、仁徳紀に登場するが、**全て活躍は韓半島**で、上記のように、百済記を引用した説話もある。つまり「**沙至比跨＝襲津彦**」は百済でもよく知られていた人物だった。妹は倭国の宮で倭王に仕えていたと記している。襲津彦はおそらく加羅または北部九州の倭人の有力首長だったと考えられる。

（その後に襲津彦またはその子孫が多くの子孫を多く引き連れて東遷しての葛城地域に居住して、

渡来人を率いる大氏族になったのである。)

★大和岩雄氏は、葛城襲津彦は「**踏鞴津 (多大浦)**」の首長であったと述べている。その一部を下に記しておく。

《東アジアの古代文化 37 号 『朝鮮半島に倭人はいたか』 1983 年 》

* 三国史記・新羅本紀には、倭が新羅を攻めて略奪した記事が多くあり、日本書紀の神功 5 年の記事に「襲津彦が**草羅城**を襲って、新羅の「浮人」を連れて来た」とある。

この記事は慈悲麻立 5 年 (362 年?) までの「虜去」や「奪掠」した記事と重なる。

* 草羅城は新羅本記の悲麻立 16 年 473 年、倭人が侵入した軟良城のことである。

ところが、襲津彦は踏鞴津 (多大浦) に陣して、草羅城を攻め落して捕虜を連れ帰っている。(葛城の 4 邑の漢人の祖)。この**踏鞴津 (多大浦)** 周辺は、朝鮮半島の倭人の本拠地であったと考えられる。

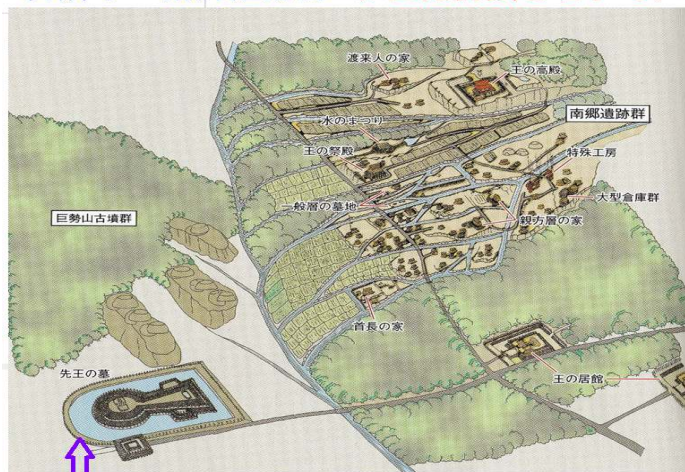
* 4～5 世紀の韓半島の倭人は、三世の狗邪韓國の後身であろう。**襲津彦はその王であることになる**が、加羅を討ったことは考えられないことではない。

* 襲津彦は倭王と同じレベルの権力を持っていた。磐の媛が皇后であったのは当然のこと、仁徳が磐之姫の嫉妬をおそれたのは、葛城氏を畏れたであると推察する。**倭王と葛城氏は王権の両輪であったのである。**

御所市・南郷遺跡群 (5世紀初頭とされる)



室宮山古墳



「葛城襲津彦の墓」の説がある室宮山古墳

④太子直支の人質と帰還

《応神 8 年》百済人が来朝した。百済記に述べているのは、阿花王が立って貴国に無礼をした。それで枕弥多礼、支侵、谷那、幌南、東韓の地を奪われた。このため、王子直支を天朝に遣わして、先王の好を修好した。注記「和睦のために王子を人質に入れた」

《応神 16 年》、王仁が来た。太子菟道稚郎子はこれを師とされ、諸々の典籍を学ばれた。王仁は書首の先祖である。この年、百済の阿花王が薨じた。天皇は直支王をよんで語っていわれた。「あなたは国に帰って位につきなさい」と・よって東韓の地を賜わり遣わされた。平群木菟宿禰、的戸田宿禰を加羅に派遣した。木菟宿禰らは兵を集めて新羅との国境に臨んだ。そこで弓月の民を率いて、襲津彦と共に還った。

★太子直支が人質になったことは、三国史記・百濟本紀には、「阿莘王六年（397年）阿莘王、倭國と好みを結び太子腆支を爲質とする。」と記されている。ところが日本書紀では、本文ではなく「百濟記に述べているのは」との引用である。この人質などの阿莘王時代（390年代）のことは、ヤマトでは知られていなかったことになり、東遷以前の九州倭王時代のことと考えられる。広開土王碑の、「己亥（399年）、百殘、誓いに違ひ、倭と和通す。」にあたりとされる。

★次の直支王の帰還については、百濟本紀では「倭王が兵士100人で護衛させた」ことや「百濟本国で王位争いが起きたため国境で待機した」「百濟国人は磔礼を殺して腆支王を迎え入れ、百濟王として即位した」ことなど詳しく記されている。

ところが、日本書紀では単純に『あなたは国に帰って位につきなさい』と語っただけである。雄略天皇時代の武寧王や東城王の帰還での詳しい記述とは表現が全く異なる。よって、直支王の人質や帰還はヤマトには伝承されていなかったことになる。倭王はヤマトの王ではなく九州の王であると考えられる。

★応神紀になると、ヤマトの事績が多く記されるようになる。さらに阿直岐と王仁、弓月の君、縫衣工女など多くの渡来人がやってきたことなども記されている。これらは九州倭王の東遷後の事績であると考えられる。つまり、九州倭王の東遷はこの時期、直支王即位後の時代（410年前後頃）に行われたと考えられる。

4. 伊都国王の東遷と仁徳王権の成立について

(1) 倭の五王の南朝への朝貢は河内王権成立によって始まった

★百濟の南朝への朝貢は、近肖古王の時代からほとんどすべての王の時代に朝貢している。

372年（晋書 簡文帝・咸安二年）百濟と林邑の王がそれぞれ使者をよこした。

百濟王「夫余=句」を鎮東將軍領樂浪太守とした。百濟本紀と合致。近肖古王17年

384年（晋書・太元九年）百濟王が使者をよこして方物を献じた。《百濟本紀と合致》

386年（晋書・太元十一年）百濟王の世子「夫余=暉」を「使持節都督鎮東將軍百濟王」とした。

416年（宋書）「夫余=映」を「使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王」とした。

《百濟本紀と合致・直支王16年》

420年（宋書）「夫余=映」を「鎮東大將軍」に進めた。《百濟本紀と合致には記載なし。》

その後も百濟は424年、429年、440年、443年、450年、457年に朝貢

★ところが、倭国の南朝への朝貢の最初が記されるのは413年である。（晋書・安帝紀）

★倭国は近肖古王と貴須王の時代や阿莘王から直支王即位まで、百濟と友好関係にあったことがわかる。このとき、倭王も同様に東晋や宗に朝貢することができたはずである。新羅でさえ、377年と382年に前秦に朝貢しているからである。

★では、なぜ朝貢しなかったのか、その理由は、この九州倭王（伊都国王）は倭全体の王ではなかったからと考えられる。朝鮮半島での新羅への軍事・外交を主導し、百濟と友好関

係を結んだのは伊都国王であったが、倭全体を代表する王はヤマトの神武＝崇神系の大王だったからであると、筆者は考える。その後、九州の倭王が東遷して倭全体の王となつてから初めて朝貢するようになったと考えられるのである。次節では、九州倭王の東遷について詳しく述べる。

(2) 伊都国王と伽耶勢力による東遷の根拠

★筆者は、四世紀末に朝鮮半島での戦いを主導した勢力（北部九州と伽耶の倭人）が東遷したことは史実と考える。その根拠を述べ。

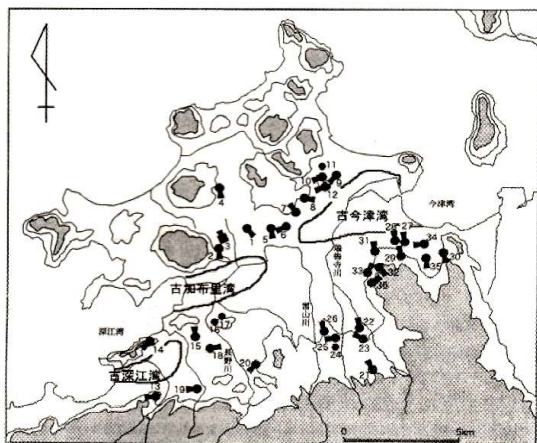
(ア) 応神と仁徳の宮はヤマトではなく、摂津や河内である。（軽島の明宮または大隅宮、高津宮）

(イ) 大和の古墳をはるかに凌駕する古市古墳群と百舌鳥古墳群が出現する。副葬品が韓半島関係遺物（武器や馬具）が主流となり、須恵器の陶村での製作、河内での馬の飼育も始まる。



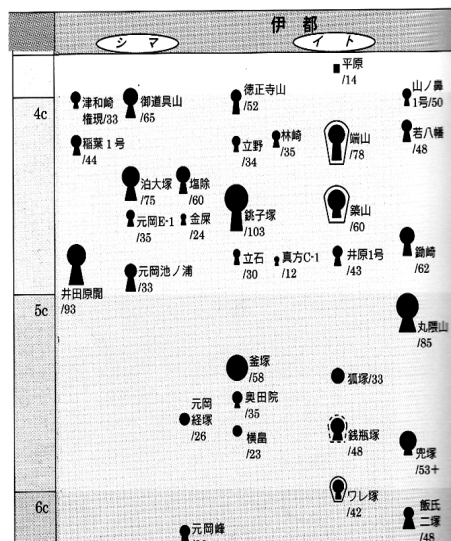
(ウ) 物部・大伴氏に代わって、それまで全く登場しなかった葛城氏が突然に大臣となっている。その本拠地であった御所市の南郷遺跡では5世紀前半ころの加羅系の様々な遺物が大量に発掘されていて、渡来人たちが大量に移住してきたことが明らかになっている。

(エ) 日本書紀からは、住吉の三神や、安曇氏など九州出自の海人氏族も応神・仁徳王権を支えるようになったことがわかる。難波津での八十嶋祭り（即位儀礼）は応神・仁徳紀に始まったとされる。（岡田精司説）



糸島半島・今宿平野の首長墓の分布
1. 津和崎権現 2. 稲塚1号 3. 稲塚2号 4. 関1号 5. 御道山 6. 泊大塚 7. 元岡E-1 8. 元岡池ノ浦 9. 塩院 10. 金塚 11. 元岡殿塚 12. 元岡石ヶ原 13. 徳正寺山 14. 立野 15. 鉄子塚 16. 金塚 17. 横島 18. 第二塚 19. 渡田二塚 20. 横枕 21. 井原1号 22. 塚山 23. 栗山 24. 猿塚 25. 鉄子塚 26. フレ塚 27. 山ノ鼻1号 28. 山ノ鼻2号 29. 吾八塚 30. 磯崎 31. 丸塚山 32. 兜塚 33. 飯氏二塚 34. 今宿大塚 35. 谷上 36. 飯氏E-1-4

図 27 糸島地方（上）、福岡平野・粕屋地域（下）の主要首長墓分布図
（重藤謙行 2007 より引用、一部加筆・修正あり）



伊都
シマ イト
平原 /14
山ノ鼻 1号/50
徳正寺山 /52
山 /50
津和崎 権現 /33
御道山 /65
立野 林崎 /35
丸山 /78
稲塚1号 /44
泊大塚 塚除 /75
元岡E-1 金塚 /35
鉄子塚 /103
丸山 /60
元岡池ノ浦 /73
立石 東方C-1 /12
井原1号 /43
鐘崎 /62
井田原岡 /83
丸塚山 /85
釜塚 /68
元岡 奥田院 /35
丸塚 /33
元岡 経塚 /26
横島 /23
鉄瓶塚 /48
先塚 /53+
元岡 鐘崎 /42
元岡 鐘崎 /26
飯氏 二塚 /48

(オ) 北部九州の糸島市にはヤマトの前期古墳を上回るほどの古墳が多数存在しているが、5世紀になると糸島市の古墳は急激に減少してきている。(上図)

(カ) また糸島市には、古墳時代前期の集落跡が多く存在しており、邪馬台国時代以降古墳時代になっても、伊都国が韓半島などとの交易の中心地であったことが明らかになっている。

《岡部裕俊（伊都国歴史博物館） 『季刊考古学別冊 18～邪馬台国を巡る国々～』 》

「近年の調査で、伊都国域における集落の分布が状況が明らかになってきた。確認された集落数は30カ所を超え、分布の密度は高い。これらの集落は弥生時代中期後半以後活動が活発化し、古墳時代前期にかけて連続して営まれている。」

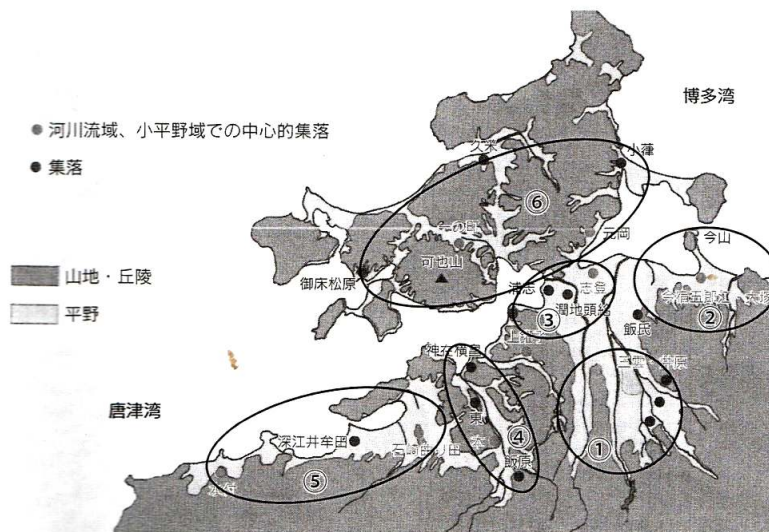


図1 伊都国の基本地形と弥生時代の主な集落の分布

(キ) 神功王后が筑紫に着いたとき、(伊都国王と推察される) **五十迹**が迎えに来たことやホムタケ(後の応神とされる)が生まれた宇美(蚊田)は伊都国の領域である。東遷のリーダーは伊都国と関係あることになる。

(ケ) 記紀では神功王后の母方の祖先は新羅の王子である天の日矛とされている。一方、既に述べたことであるが、新羅本紀によれば、「新羅王は倭国王から妻を求められ、阿飡の急利の娘を送った。」とある。また「筑前の国風土記逸文」においても、「**五十迹**(伊都国の王)は高麗の国の意呂山に天から下った天の日矛の末裔である。」と記している。つまり、**五十迹**が新羅王の血を引いているということは、新羅本紀に記す「阿飡の急利の娘を妃にした倭王」は、「**五十迹**(伊都国の王)である可能性が極めて高いことになる。

(コ) 南北朝時代の北畠親房が「天皇家は三韓と同種なり」と記すことは、「新羅または加羅の王族の血が天皇家に入っている」ことを認識していたのである。

(サ) 三国遺事の『駕洛国記』では、金官伽耶国の始祖の首露王は、「亀旨峰(クシフル)に落下した卵から生まれた」ことになっている。日本神話のニニギ尊が天下った高千穂の「久士布流岳」も亀旨峰(クシフル)が訛ったもので、日本の建国神話には伽耶の建国神話が取り入れられている。さらに首露王の母とする説話での母の聖地の「伽耶山」と同じ名の伽耶山が糸島市に存在する。



首露王陵



元伊都国の可也山



伽耶の亀旨峰



日向の国 高千穂の峰「久士布留岳」
候補地・高千穂の峰

(3) 東遷のリーダーは伊都国王

★筆者は、伽耶と伊都国の勢力が東遷して、河内を本拠とする王権を成立させたと推測する。その最初の大王が仁徳大王であり、神功王后やその子とされる「ホムタワケ」は、崇神・垂仁大王と仁徳大王をつなぐために創作されたものとする。 (後に紹介するが、吉井巖氏も述べている。)

《東遷を促したこと》

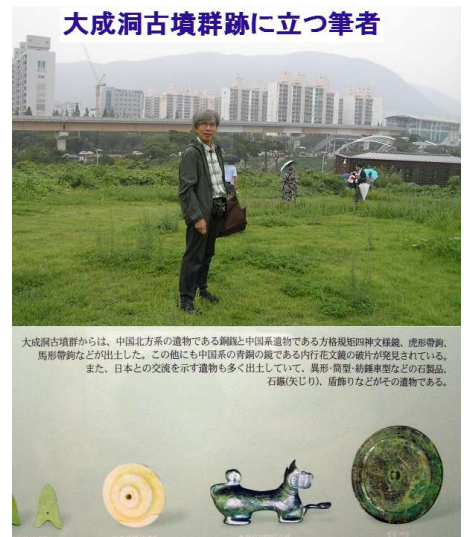
★既に論証したように、朝鮮半島での軍事的攻勢は北部九州と伽耶の倭人によるものであった。東遷の理由は、404年などの対高句麗戦での壊滅的な大敗にあると考えられる。さらにヤマト王権の弱体化（分裂）とも関係しているかもしれない。北部九州と伽耶の勢力としては戦略の転換を余儀なくされ、伊都国王自らが畿内に東遷し倭国全体を統括することになったと推測する。

★釜山大学・申敬澈は次のように述べていて、筆者の説を補強する。

《東アジアの古代文化 『五世紀の日本列島と伽耶』 》

「諸伽耶の支配者集団の墳墓群は、伽耶の滅亡のころ、ほぼ六世紀中ごろまで築造が続いていますが、**ただ一つ大成洞古墳群**だけが途中で造営が中断される特異な現象が見られます。

この頃、**金官伽耶が極めて深刻な混乱状態にあったことを示唆すると同時に、金海地域では金官伽耶の支配者系譜が断絶されたことを端的に示している、と**考えてよいでしょう。……より本源的な契機は、好太王碑文第二面の庚子年 (AD400年) 条の、高句麗軍の南征と関連があるに違いません。**大成洞古墳群の築造中断は、金官伽耶の没落を意味するもので、同時に初期須恵器が近畿を中心にして初めて生産されたことは、金官伽耶住民の日本への移住を意味しているのです。」**



(4) 元ホムタワケと元イザサワケの名前の交換

★この伊都国王を中心とする騎馬文化勢力が近畿地方に東遷したとき、越の敦賀の敦賀気比にはヤマトを追放された垂仁の王子である「誉津別=ホムツ (タ) ワケ」が、越・丹波地方の王として擁立されていた。天照大神～神武=崇神の血を引く貴種であったからである。

★古事記には武内宿禰が幼童太子（後の応神大王）を連れて敦賀に行き、「**気比の大神と太子とが名前を交換したこと**」が記されている。このことは「ヤマトオグナ」と「クマソタケル」の名前の交換のような物語の説話とは異なり、事実であるからこそ記されたはずである。というのは、日本書紀にも名前の交換がはっきりと記されていて、それだと大神のものと名を誉田別命、太子のものと名を去来紗別(イザサワケ)尊ということになる。けれどもそういった記録はなくまだつまびらかでない。とも記されているからである。これはこの記事が**創作ではなく、伝承に基くもの**であったことを示す。

★つまり、気比の大神の元の名は「ホムツ (タ) ワケ」であり、垂仁の王子である「誉津別=ホムツ (タ) ワケ」であったのである。一方、東遷した伊都国王の元の名が「イザサワケ」であったことになり、名前の交換により、ホムツ (タ) タワケと名乗るようになったということである。



★元イザサワケであった伊都国王は、「ホムツ（夕）ワケ」を名乗ることにより、畿内勢力からも倭王として認められたことになり、河内・摂津を本拠地として新王権を立てることになったと推察できる。吉井巖氏も次のように述べている。

*ホムダワケなるものの実在的可能性と、応神の非実在像を切り開くカギ

「品田の日の御子大雀大雀 風化せる太刀 木鶴木 末冬 滝の 素幹が下
木の 差や沙や」・・・仁徳もまたホムダワケの名でよばれていたことが
わかるのである。 《天皇の系譜と神話 昭和42年 塙書房》

★仁徳の子とされる履中大王は「イザホワケ」である。名前の交換後の気比の大神の名の「イザサワケ」は、なぜ履中の名「イザホワケ」と類似していることも合理的に説明できる。それは仁徳の元の名が「イザサワケ」であり、履中の「イザホワケ」とは親子または近親者であったことを示している。

★垂仁時代にヤマト王権は分裂して、ヤマトを追い出されたホムツワケ勢力はヤマトの勢力と対立していたが、元ホムタワケも仁徳と同盟関係を結ぶことにより、当時ヤマトには及んでいなかった王権を強化できるようになったと推測する。

★元ホムタワケ（応神）の子である菟道稚郎子が太子となり、仁徳＝元イザサワケの協力により、異母兄とされる大山守王子（ヤマト勢力の代表）を水死させ、大和まで王権を及ぼすことができるようになったのであろう。記紀にはその後、菟道稚郎子がオオササギ（後の仁徳）と大王位を譲り合ったことや菟道稚郎子が自殺したことが記されている。そしてオオササギが仁徳大王として即位したことになる。さらに、菟道稚郎子の妹の女鳥王と異母兄弟の速総別王が殺されて、菟道稚郎子の同母妹である矢田王女を妃（磐之媛の後の王后）としたことになっている。

しかしこれは潤色されていることは明らかである。仁徳＝オオササギ＝元イザサワケは元ホムタワケ（応神）の死後、元ホムタワケの子である菟道稚郎子や速総別王を殺して王権を完全に元ホムタワケ系から奪ったことを説話化したものと考えられる。

(5) 応神は、非実在である神功王后の子ではなく、

垂仁の王子「誉津別＝ホムツ（夕）ワケ」であった根拠

★神功摂政69年の後、応神が即位したことになっているが、これは年齢的にあり得ない。また日本書紀によれば葛城襲津彦は神功王后と同世代である。娘の磐之媛が神功皇后の孫とされる仁徳の王后とされるのは世代が合わない。つまり、仁徳が応神の子とするのは偽りで、仁徳と応神はほぼ同世代であったのであり、「イザサワケ」と「ホムツ（夕）ワケ」の名前の交換と整合性がある。仁徳と磐之媛は5世紀前半の人物で、つまり韓半島で4世紀末～5世紀初頭に高句麗と戦った勢力の次の世代と考えられる。

★応神は、矢河枝比売との出会いと敦賀の蟹の歌など、越との関係があることがわかる。応神が越は垂仁の王子誉津別＝ホムツ（夕）ワが辿り着いた地である。

★後に、応神五世の孫の男大迹(ヲホド)が越のクニから迎えられて継体大王として即位したことになる。継体大王は新王朝との説が多いが、大王には血統がなによりも重要であるはずで、応神五世の孫は真実である。既に第1章で述べたが、積日本紀に引用されている「上宮記一云」には、応神大王のことを凡牟都和希(ホムツワケ)王と記している。つまり、応神大王は垂仁の王子・ホムツワケ)であり、その五世孫が継体大王であることになる。

★次に応神大王の後妃を示す。

(ア) 高城の入姫、仲姫、弟姫の3姉妹(品陀の真若王の王女)

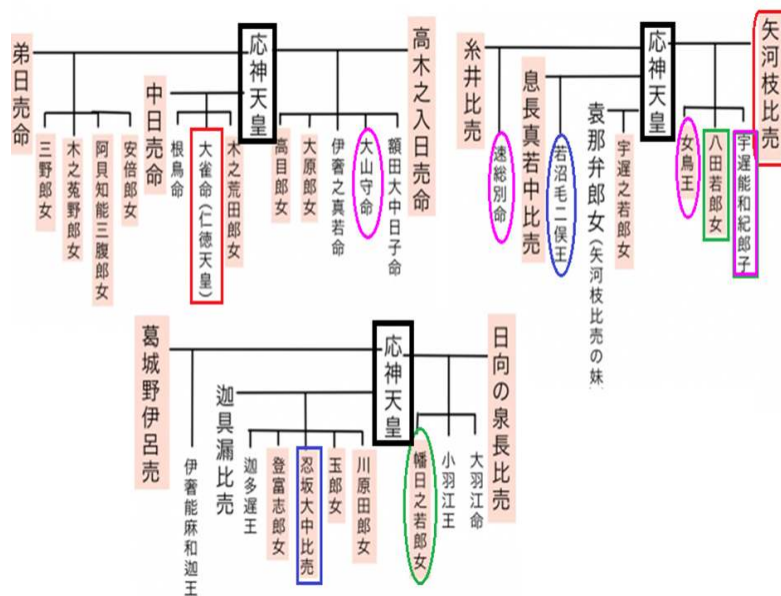
(イ) 宮主の矢河枝姫(和珥氏の祖の日触の使主の娘)

(ウ) 息長真若中比賣 (エ) 迦具漏比賣 (オ) 日向泉長媛 (カ) 葛城之野伊呂賣

彼女たちは、日向泉長媛を除いて畿内の女性であり、垂仁の王子(元ホムタワケ)にふさわしい女性たちであり、東遷したとする大王らしくない。

これに対して、仁徳大王の王后・妃は渡来氏族の葛城襲津彦の娘の磐之媛と日向の髪長媛で、北部九州出身者にふさわしい女性である。仁徳こそが東遷した大王であることになる。

古事記での応神天皇の後妃と皇子・皇女



(6) 応神と仁徳の陵について

★継体大王の陵は高槻市の今城塚古墳に間違いない。



茨木市、太田茶白山古墳
(三嶋藍野陵として継体天皇陵に治定)

その西に、宮内庁が継体陵に治定されている**大田茶臼山古墳**がある。(上図) この古墳は通説では5世紀半ばのものとされる。しかし、筆者はもう少し古いと考えている。というのは、大田茶臼山古墳は応神陵とされる**誉田御廟山古墳**と相似形であり、両古墳はほぼ同時代のものと考えられるからである。とすれば、継体陵はなぜ大田茶臼山古墳の傍に造られたのであろうか。その理由は一つしかない。応神(元元ホムタワケ)の五世孫である継体大王は、5代先祖である応神(元元ホムタワケ)の陵の傍に葬られて祀られたのである。

**継体陵とされる太田茶臼山古墳こそ
元ホムタワケの応神天皇陵の可能性？**



太田三丁目に、5世紀に築造された太田茶臼山古墳(継体天皇陵)があります。墳丘長226mを測り、周囲に幅30mほどの濠をもつ三島地域最大の堂々たる前方後円墳で、宮内庁によって管理されています。

★そうすると、応神の墓とされる誉田御廟山古墳の被葬者はだれなのか。誉田御廟山古墳が応神陵とする根拠は古事記の記載による。ところが不可解なことに、日本書紀には応神の墳墓が記されていないのである。日本書紀編纂者は応神の墓は誉田御廟山古墳ではないと考えていたからであろう。そして仁徳はホムタワケを名乗っていた。つまり**誉田御廟山古墳はホムタの墓=名前の交換後のホムタワケの墓**である可能性が高い。

**応神天皇陵(誉田御廟山古墳)は
ホムタワケでもあった仁徳の陵？**

5世紀前半の築造と考えられている。



ホムタの日の御子、オオササギ

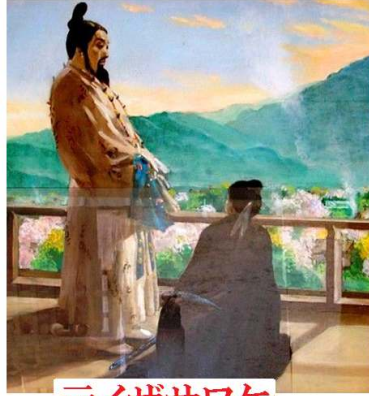
**仁徳天皇陵(大仙陵古墳)は
五世紀後半築造の可能性が高い**



★一方、仁徳陵に治定されている大仙古墳は、考古学的に5世紀後半の築造で仁徳の墓ではない。



元ホムタワケ
応神大王



元イザサワケ
仁徳大王

(7) 直木孝次郎と吉井巖氏の説

★まず直木孝次郎氏の「応神＝仁徳」説を紹介する

《『直木孝次郎 古代を語る 5 大和王権と河内王権』 吉川弘文館 2009 》
直木氏の「応神＝仁徳」説の根拠は次のようなものである。

- (ア) 記紀での応神紀と仁徳紀に混乱がある。
 - (i) 枯野舟の説話が記では仁徳紀、紀では応神紀に記されている。
 - (ii) 百濟から七枝刀を贈られたことは、記では応神紀、紀は神功紀に記されている。
 - (iii) 吉備の黒姫（兄姫）との別れは、記では仁徳紀、紀では応神紀に記されている。
- (イ) 古事記の応神紀でのオオササギを讃える歌「ホムタの日の御子、オオササギ、オオササギ」はホムタの日の御子＝オオササギ、つまりホムタワケ（応神）＝オオササギ（仁徳）と考えなければ理解できないとする。
- (ウ) 日本書紀にはホムタワケの墳墓が記されていない。

★筆者は以前、この「ホムタの日の御子＝オオササギ、つまり（応神）＝（仁徳）」に強く賛同して、直木説を受け入れていた。その後「応神＝仁徳」ではなく、応神紀は元ホムタワケ時代の事績であり、仁徳紀は河内王権の初代の首長であった元イザサワケ事績であると考えようになった。現在の筆者の説は、直木氏よりも、吉井巖氏の説とほぼ同じである。吉井氏の説を抜粋する。

《『天皇の系譜と神話 I、II』 昭和42年 塙書房 》

- (ア) 崇神王朝の系譜から、応神は、タカキイリヒメの入り婿となる形で王権の継承が語られる。・・・現系譜は、これに東西平定のヤマトタケル、および半島征服の仲哀・神功の2世代を、景行・応神の間に加えて成立したのであるが、これに伴って崇神王朝の系譜も、タカキイリヒメと応神の婚姻の要求にそくしながら、崇神から応神までの六代にあわせて、その系譜を同じく六代に引きのばして行く。

★つまり、崇神・垂仁王朝後の、景行から応神までの系譜はつくられたものとする

- (イ) 応神記物語もまた応神の存在を支えるものではなく・・・

難波に本拠をもつ新しい王朝の初代天皇としてすでに仁徳があり、応神はさらにその上に重ねられた天皇であると考えられる場合に、いくつかの理解しやすい問題が現れてくる。記紀の記述をみると、王室は聖帝にはじまり悪帝に終わるという、中国史書よりの移入の思想に基いて書かれているのではないかと考えられるところが確かにある。・・・ここには仁徳にはじまり武烈に終わるという観念が示されているとみるべきではなかろうか。仁徳の父としての応神がはじめから存在していた場合には、かかる形として現れることが不可能ではなかったのか。・・・

応神は別に、この仁徳の前に据えられた、応神・仁徳と続く現形態ができあがったのである。応神は、初代天皇・仁徳の上に作られた始祖的天皇である、と考えることだけが、・・・十分に説明しようと考えられるのである。

★仁徳が新しい王朝の初代であり、応神のその父として作られたとしている。

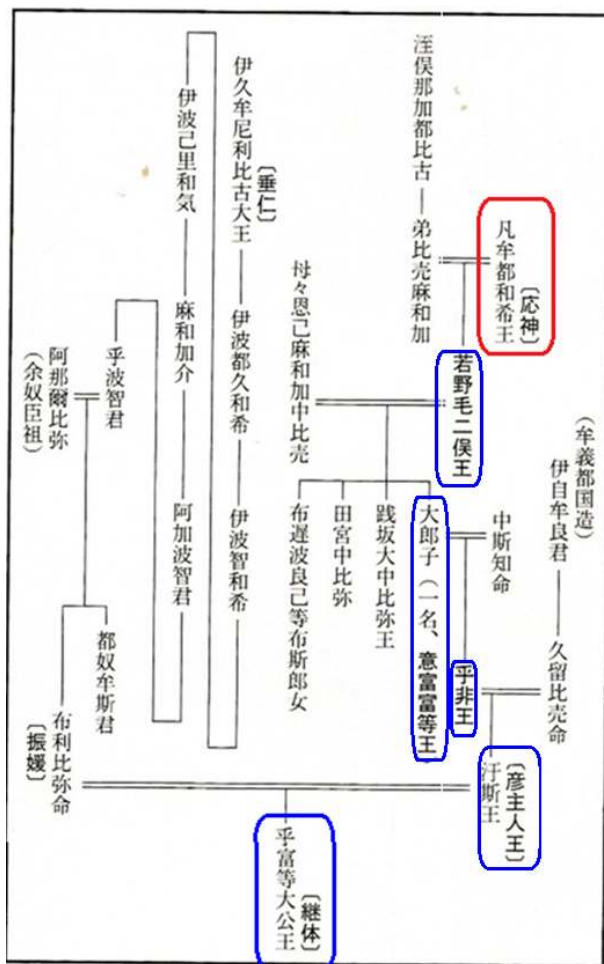
(ウ) ホムダワケなるものの実在的可能性と、応神の非実在像を切り開くカギ

「品陀の日の御子大雀大雀 佩かせる太刀 木つるき 末振ゆ 多木の 素幹が下木の さやさや」・・・

仁徳もまたホムダワケの名でよばれていたことがわかるのである。

★筆者の説「仁徳は名前の交換によりホムダワケを名乗った」と同じである。

(エ) 記の原形系譜と紀の系譜、それに上宮記逸文の系譜の三者は全く同一の系譜記述であるということができる。



・・・この結論はホムツワケ王が、ホムタワケ王すなわち応神と系譜の上で重なる存在であること、言い換えればホムツワケ王はホムタワケ王とは同一天皇像であったことを我々に教える。・・・ホムツワケ王物語における王の神秘的な出生、その奇跡的な回生復活の条々は、王朝の始祖王としてふさわしい内容であったといえないであろうか。

釈日本紀に引用された上宮記逸文には継体天皇の出自についての記述がある。これを系譜化してみよう。(上図) 凡牟都和希王をホムツワケ王とよむべきとすれば、この人物は今我々が問題としているホムツワケ王物語の主人公と同一人物としてよい公算は多大とあると言ってよかろう。継体は応神の末裔であることを主張したのであるが、上宮記逸文では、その応神にあたる存在はホムツワケ王となっていたわけである。

記紀の記述と上宮記逸文の相違を如何に理解すべきであろうか。その答えは一つしかない。継体がその祖にかけた王朝の始祖的存在に二通りの伝承が存在したのである。一つはホムツワケ王、一つはホムタワケすなわち応神であった。

★筆者の説と同じことを詳細に論証されている。心強い想いである。

(オ) 垂仁の皇子ホムツワケ王が天皇であれば、垂仁の王朝・三輪王朝を継ぐ天皇でなければならぬ。ワケの称号に注意するならば、五世紀の仁徳王朝に類似する天皇であったと考えなければならない。言い換えるならば、私が仁徳王朝の始祖的天皇像として同一の性格をもつ天皇となるのである。ホムツワケ王は応神と同じ位置を果たして主張しうるのであるか。ホムツワケ王はなぜ皇統系譜から消え去り応神が出現することになったのか、それが証明せられない限りホムツワケ天皇説は完全とは言えない。

★完全ではないとされるが、「垂仁の王子・ホムツワケが応神 (ホムタワケ)」であるということである。50 年以上前に筆者と同じことを専門家が述べていたのである。筆者の説が決して奇抜なものではないのである。

むしろ現在の文献史学者は何かの力により語れなくなっているのである。

【まとめ】

- ◆垂仁の後とされる、景行、ヤマトタケル、成務、仲哀・神功は造作されたものである。
- ◆神功王后は、当時の倭の新羅侵攻を参考にして創作されたものである。そして、隋・唐向けに神功王后が卑弥呼であるように魏志倭人伝を引用した。
- ◆神功の子 (幼童太子) が応神大王になったとして、騎馬文化勢力の東遷による王権篡奪 (河内王権成立) をぼやかし、垂仁大王からの大王の系譜が繋がっているように造作した。継体の先祖である元ホムツワケが、垂仁の王子ホムツワケであることを隠すためでもあった。
- ◆公開土王時代に新羅に侵攻していた伊都国と伽耶勢力が東遷して河内王権を成立させた。
- ◆東遷の中は伊都国王であった元イザサワケと伽耶の首長の葛城襲津彦であった。
- ◆元イザサワケと元ホムタワケが敦賀気比において名前を交換することにより、その元イザサワケが仁徳大王として即位した。
- ◆伊都国王 (元イザサワケ=仁徳) の先祖の母は新羅の王族であり、大王家に新羅王の血が入るこ

ととなった。このことを暗に示すために天日矛渡来伝説を導入して、神功王後の母方につなげた。
了

※次号では倭の五王と允恭～雄略時代の大王位争奪戦について述べる。